

Attention information

システムを延伸稼働させる専門企業「データライブ」 メーカー保守に頼ることなく安定稼働 話題の「EOSL/EOLハードウェア保守」

データライブ株式会社（東京・文京、山田和人社長）の「EOSL/EOL（End Of Life = 製造・販売終了）ハードウェア保守」を活用したサーバ・ネットワーク機器の保守期間延伸が注目を集めている。EOSL（End Of Service Life = メーカー保守終了）を迎えた IT 機器に対し、どのように保守期間を延伸しているか。そのサービス概要と、BCP や IT 投資の選択と集中などのビジネス課題で、見直しが必要となった IT システムのライフサイクル再計画における活用事例を同社に聞いた。

「EOSL オンサイト保守」の導入事例

データライブの「EOSL オンサイト保守」を導入したある企業は、コストリダクション（コスト削減）の一環で、昨年第 1 四半期に発生する保守終了機器群に対し「EOSL ハードウェア保守」利用の検討を行っていた。

変更計画のない 76 台のサーバに対し、11年3月から仙台、さいたま、板橋、有明、幕張の各拠点にあるサーバを継続利用したいという内容だった。

まずは、導入前に保守延伸に伴う課題を検討。当時、保守予備部材の確保や保守サービス利用方法、サービスレベル選択の柔軟性が挙げられていた。

①あらかじめ保守対象の機器構成一式と障害発生予測分を予備として整備・

保管し、十分な供給可能な体制を整えられていること。

②障害時の対応方法を現在と大きく変えず、運用に大きな負担をかけることなく、コール先の変更のみで速やかに利用ができること。

③サービスレベルは、同一システム内に平日日勤帯、24時間365日を混在させることができ、システムの重要度に合わせて適切に選択ができ、安全性

合理的でシンプルな解決方法に

とコストの両立が可能なこと。こうした3つの課題を解決するために、データライブのEOSL オンサイト保守が柔軟に対応できることを確認。採用を決めた。

採用直後に発生した東日本大震災では、停電によりハードウェアの故障障害が断続的に発生したが、交換パーツの特定や必要部品の供給、交換作業などを問題なく実施。無事復旧させた。

その後発生した経年劣化による障害にも難なく対応できており、現在も安定稼働を続ける。結果、問題なく保守期間延伸を成功できたことで、システムリプレースやシステム収束、あるいは当面の継続利用を柔軟に組み立てることができ、無理の無いシステム維

持の計画が可能となったのだ。

海外で普及した保守形態に

「EOSL/EOL ハードウェア保守」とは、メーカー保守終了機器に対し、ハードウェア保守期間を延伸するサービスだ。

データライブでは、主な海外メーカー製サーバやネットワーク製品（Oracle[Sun]、HP ProLiant、DELL



<http://www.datalive.co.jp/>

PowerEdge、CISCO など）については、「十分な供給体制ができあがっており、メーカー保守期間終了後もハードウェアの故障に対して修理を行うことができる」と話す。数年の稼働実績があり、利用環境やソフトウェアに大きな変更が無くなったシステムに対して有効だ。今月には「HP 9000」「HP Integrity」に対しても体制を整えた。

既に海外ではこの保守形態が普及しており、メーカーに依存しない第三者保守ベンダが再利用可能なハードウェアの供給体制とサービス体制を整えることで延伸を実現。システム継続利用を実現している。

国内でも、IT システムの利用期間見直しがされ、機器ライフサイクルに大きな影響を与えている。こうした課題に対し、シンプルかつ合理的な解決法として、「EOSL/EOL ハードウェア保守」の活用が注目され始めているのだ。